日本語研究者はいつ論文を書くか

――『日本語研究文献目録・雑誌編』に見られる年齢構造――

荻　野　綱　男

キーワード：論文執筆年齢・論文生産性・分野別平均年齢

要　旨

『日本語研究文献目録・雑誌編』に収録されている論文8万本の著者名を、異表記・別名・旧姓などを確認しながら「名寄せ」し、各人の生年月日を求め、これらの論文を書いたときの著者の年齢を計算した。その結果、日本語に関する論文の生産は46歳がピークで、全部の平均年齢は48.41歳であった。また、この30年間で論文生産年齢が次第に高くなっていく傾向がわかった。

個人ごとに論文生産性を計算し、その多少を基準に、全部の著者を3グループに区分し、それぞれのグループの論文生産年齢を集計した。その結果、多産者グループは、60―70代にかけて論文をたくさん書くことがわかった。

分野別に論文執筆年齢を集計してみると、日本語情報処理のような分野は、論文執筆年齢が低く、比較的高齢者が書く分野というと、「国語問題、古典の注釈、国語学一般」などが挙げられる。

1.　研究の目的

ある分野の研究の全体像を把握しようとするとき、どんな人がどんな研究をしているかを大局的にながめる必要がある。経験的に見て、研究の進め方は、研究者の年齢によって左右される部分がある。そこで、現代の日本語研究の動向を見ようとしたとき、研究者の年齢の観点からながめて、日本語研究が一体どのように行なわれているかを全体的に把握したい。

研究者個人の側から見るならば、何歳ぐらいで何本くらい論文を書くものだろうか。個人の中の成長・変化のようすをとらえることも、いまだかつておこなわれていない。

以上のようなことを踏まえて、この論文では、年齢が我々の研究にどのような影響を与えているか、また、一生のうちのどの年齢のとき、どのような研究を行なっているのかを明らかにする。さらに、これと関連して、時代ごとの違い、分野ごとの違いについても考察する。

2.　データ整備上の諸問題

2―1　論文データベースの利用

調査対象となる研究論文の範囲は、秀英出版から出ているフロッピー版の『日本語研究文献目録・雑誌編』(以下フロッピー版と略称する)にした。

収録されたデータの信頼性が問題になるケースもある。たとえば

B 02169|復刻影印『改正読書点例』|鈴木　朖|［文莫］9|〈1984年7月〉58

などは、1984年に新たに書かれたものではない。

2—2　個人データベースの作成

論文執筆時の年齢を決定するために、日本語研究者の個人データベースを作成する必要があった。現在のところ、3114人分のデータが収集してある。この作り方の詳細について述べる。

基本的なデータとして、国語年鑑の過去30年分の「国語関係者名薄」がある。これを全部調べてコンピュータに入力した。

それに追加して、フロッピー版で調べて名前の出現回数(すなわち論文の本数)が多い人を取り出し、そのような人について各種参考資料を調べて、生年月日を補うことにした。参考資料としては、〔1〕〜〔5〕のようなものがある。これらの資料で、名前(ペンネームを含む)・生年月日・没年月日などを計算機に入力した。なお、『全国大学職員録』は、昭和53年版以降だけに索引がついており、それ以前のものにはないので、古い時代の特定個人の情報を得るのはむずかしい。

このような参考資料調査であるが、国語年鑑の「国語関係者名薄」以外にもどんどん追加する方針でいくと、同姓同名が増えてしまい、別の問題が発生する。

個人を単位にする以上、グループは無視するしかない。「ごい　しろう・ロゲルギスト」のようなグループ名は無視することにした。

2—3　著者の識別の問題

年齢構造を調べる場合、同一人物であるかどうかは、きわめて重要な情報になる。つまり、人物の同定の問題、いわゆる「名寄せ」である。ここでは、どのような問題があったかを述べる。

2—3—1　同姓同名の問題

過去の国語年鑑をたどると、「国語関係者名薄」の中で次のような同姓同名が確認される。

(1)伊藤博(はく 1925.7/京都大・ひろし 1930.12/東京教育大大学院)

(2)金子武雄(1905.12/東京大・1906.05/東京大)

(3)後藤和彦(1929.07.12/東京大・1930.02/都立大大学院)

(4)松井利彦(1927.02/名古屋大大学院・1936.08/京都大大学院)

(5)三宅清(1911.9/東京大・1958.2/国学院大大学院)

伊藤博の場合も、漢字表記では区別できないので、同姓同名と同じ問題である。

同姓同名の場合、一方だけが国語年鑑に載っている場合もある。たとえば、国語年鑑に載っている「高木きよ子」とは別人と思われる人が最近日本語教育の分野で活躍中である。

したがって、これは同姓同名扱いにする。これには、かなりの類例があるようであるが、厳密な調査はむずかしい。

また、国語学分野以外の人と同姓同名が生じる場合がある。佐藤亮一（新潮社社長 1924.1.3・翻訳家 1907.10.18）、渡辺実（八幡学園主事 1908.11）など、広い範囲の資料にあたると国語学分野の人と同姓同名になるが、フロッピー版に収録された範囲のデータを扱うかぎりでは、あまり問題にならないだろうと考えられる。

以上のことから、「高木きよ子」を含めた6人に対しては、データから除外することにした。

2—3—2　異表記・別名の問題

ひとりの人の名前の表記に複数ある場合があり、名寄せの際の最大の問題になる。

（1）ローマ字・カタカナ・ひらがな

ローマ字・カタカナ・ひらがなの名前は、個人データベースの名薄で一致する人がひとりだけいた場合に、その人の論文と判断することにした。ただし、「かめい　たかし」の名前は、「亀井尚」の可能性もあるが、全部「亀井孝」と判断した。この処理をする場合、もしかすると若干の同姓同名のケースがあるかもしれない。

ローマ字表記では、Sakamoto, T.というような表記が問題になる。これでは「坂本敬彦(タカヒコ)」なのか「坂本朝一（トモカズ）」なのか判別できない。このような例は名寄せしないことにした。

（2）ペンネーム

ペンネームは、国語年鑑に載っている場合だけ採用し、他は無視した。したがって、ペンネームで書いていた場合は、集計されないものがある。しかし、これは著者自身がペンネームで発表すると決定したことを考えると、さほど不当な方針ではない。

（3）旧字による表記など

旧字で書いた名前は、それぞれ新字の名前と結び付けた。例：相澤正夫＝相沢正夫

誤字はなるべく直した(そういうデータも利用した)。ただし、どこまでが誤字か、はっきりしないケースもあったので、あやしいケースについては、フロッピー版のデータから、その著者の書いた論文の刊行年と分野の一覧をながめて対照することによって決定した。

例外的な扱いにしたものが一つあった。野元菊雄の場合、「野元」という名前で100回以上の随筆があるが、これは「海外子女教育」という雑誌に連載した1ページのものであるので、ここでは含めないことにした。

（4）旧姓

旧姓は、国語年鑑に情報が載っていないので、もっとも苦労した部分である。荻野が個人的に知っている場合は簡単である。それ以外がむずかしい。

まず、フロッピー版で名のほうを検索して、異姓同名のひとがいない場合は、それ以上の追求はしなかった。異姓同名の場合、国語年鑑の論文目録などを参考にして次のような人を同一人物と認めた。

（1）専門分野が同じ人で、執筆年代がずれながらつながっている。

例：三保サト子＝小沢サト子、池田摩耶子＝松田摩耶子

この場合、変わった名前の人の場合はかなりたやすく発見できるが、「和子」のような「ありふれた」名前の場合は同定できない。

(2)現姓の国語年鑑の「国語関係者名薄」の個人別の記述の「主な著者論文」のところに旧姓のものが挙がっている。

例：北原美紗子＝工藤美紗子

(3)旧姓時代から国語年鑑に名前が挙がっている人の場合、生年月日と出身校が同じ。

例：水野弥穂子＝大野弥穂子、宮坂和江＝岡村和江

以上のような処理に加えて、「国語学」の末尾に載っている「会員消息」を165冊全部チェックして、旧姓を追求した。

なお、後述するように論文執筆年齢が比較的高いので、姓の変更（そのほとんどは結婚に伴うものである）に関してはあまり神経質にならなくても（全体を見ていく場合には）大きな食い違いは生じないようである。

3. 集計結果とそこにみられる傾向

以上のような処理により、フロッピー版から抽出した著者の延べ人数92948人(ほぼ実論文数の1.1倍に相当する)のうち、51502人の執筆時年齢がわかった。これは概略的に(1割程度の誤差があるが)「論文本数」とみなしてもよいので、以下では理解しやすいようにこれを「論文本数」として扱うことにする。

3—1 年齢別基本集計

図1は、年齢別に論文本数と論文ページ数を示したものである。ページ数は、10で割って示してある。この図からわかるように、論文生産は40歳代の半ばがピークになる。この図では46歳が最頻値である。年齢の平均を計算すると、48.41歳になる。

これが、個人の年齢別の生産性（何歳の時に何本の論文を書くか）をあらわすかどうかについては、やや問題もある。人間は年齢をとるにつれて死亡する人が出てくるから高年齢層は人数が少なくなる。そこで、高年齢の人の生産性が若い人と変わら

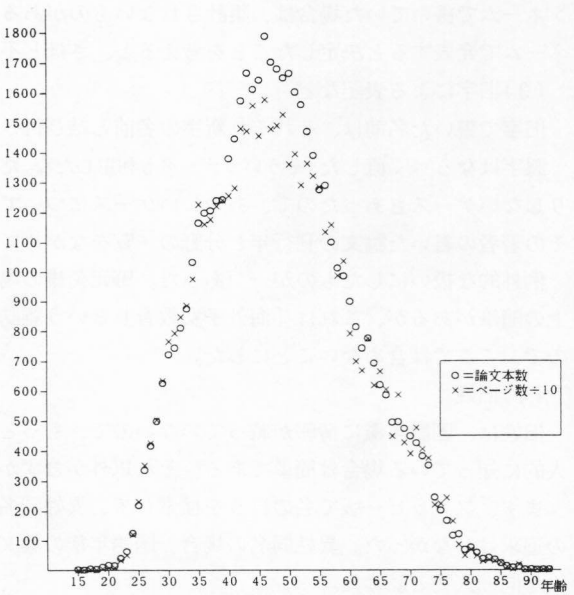

図1 年齢別の論文本数と論文ページ数

なくても、図1のように集計すると論文数は下がってきてしまうはずである。

年齢別の生産性については、論文を書かない人も含めて日本語研究者を年齢別にグループ化して、そのグループの生産性を求めるようにするのが普通であろう。もしも、論文を書いた人だけを集計すると、かなりの部分が年1本だけ論文を書く人で占められ、結果的に意味がなくなる。しかし、「論文を書かない人」をどこまで含めるようにしたらいいかは大問題である。「日本語研究者」といってもその範囲の限定はきわめて困難だし、全国民の年齢分布を基準にすればいいというわけでもない。したがって、年齢別の生産性を確実に求めることはかなりむずかしい。

参考までに、論文執筆本数が多い人（200本以上）の年齢別論文本数を資料1に示した。この資料は、あくまで1953年から1984年の範囲だけに基づいた結果であり、当該個人の全部の執筆量ではない。しかしながら、この資料1からは、いくつかの傾向が読み取れる。中沢政雄のように60代の後半から70代にかけて非常にハイペースになる人、岩淵悦太郎のように60代半ばにかなりの集中が見られる人もいるが、多くの人はそうでもなく、やはり高年齢になると論文生産は若干下がってくる傾向が認められる。しかし、その下がり方は図1に示されるような急なカーブではない。また、資料1よりも論文の本数が少ない人の場合でも、(資料の提示は省略するが)似た傾向がある。したがって、個人別に見るならば、年齢が高くなると、論文の生産が若干少なくなる程度だといえるようだ。

ところで、日本語研究者の年齢分布に偏りがあるという事実がある(詳しくは後述)。これが図1の年齢別集計に影響しているかどうかも考えておく必要がある。これについては、フロッピー版のデータは30年間にわたっているので、ある時点での年齢分布に偏りがあったとしても、30年間を総合すれば、その影響はかなり小さくなるということがいえる。

以上のようなことから、ここでは図1を単純に年齢別生産性とみなすことにした。

さて、日本語研究の論文生産年齢のカーブを、他の学問分野と比較した場合、どのような傾向が見られるのだろうか。

新堀通也〔6〕のp. 45には、社会学・教育学の場合の年齢別業績平均点が載っている。新堀のデータには単行本が含まれているので、今回の結果と直接の比較はできないが、社会学の場合は40代がピーク、教育学の場合は50代がピークになっており、日本語研究の場合とかなり近いようである。

また、新堀通也〔7〕のp. 115にレーマンの表が引用されている。それを示すと表1のようになる。表1と比較すれば、日本語研究の分野は、やや高齢なほうに偏っているといえるようである。

なお、ページ数は、論文本数と同じようなパターンを描くが、ピークのあたり(40—50歳)でやや不安定な結果になる。これは、この年齢のときに長い論文を書く人がいたりするためであると考えられる。そこで、以下では、論文本数で集計することにする。

3—2　刊年別の集計結果

フロッピー版のデータは約30年分ある。そこで、これを刊年で3分してそれぞれの年齢

別グラフを作成することにより、30年間の年齢構造の動きが把握できることになる。その結果を図2に示した。

この結果から、論文生産年齢が次第に高くなっていく傾向が読み取れるであろう。平均年齢を見ると、45.33、47.94、51.29となる。このような結果になる原因は、日本人全体の平均寿命が伸びたことである。日本語研究者も高齢者の比率が高くなり、それらの人々がある確率で論文を生産するならば、全体として論文生産年齢は高くなるはずである。

表1 領域別最高業績生産の平均年齢

詩	26〜30
化学	28〜32
物理学	30〜34
エッチング	30〜34
発明	31〜35
短編	31〜37
油絵	32〜36
数学	34〜38
医学	35〜39
哲学	35〜39
文学	38〜42
建築	30〜44
天文学	43〜47

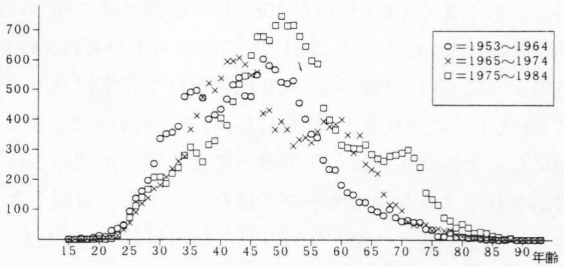

図2 刊年10年刻みに見た年齢別論文本数

図2では、別の傾向も読み取れる。1953〜1964年で50歳前後にピークがあるが、それが1965〜1974年の60歳前後にシフトし、さらに1975〜1984年の70歳前後にシフトしている。このような結果になった理由として、研究者の年齢分布に偏りがあると考えられる。田尻〔8〕は、『国語年鑑　1989年版』の「国語関係者名薄」を調査し、日本語研究者には年齢層別に大きな偏りがあることを明らかにしている。これをさらに補充するため、国語年鑑の1959、1970、1980、1990年版の「国語関係者名薄」の全員の年齢を集計し、1歳きざみでグラフ化したのが図3である。(ただし、図3は±1歳の幅でスムージング処理がほどこしてある。) 名薄作成時点は、1959年版ははっきりしないが、そのあとは1969.12、1979.12、1990.4である。この結果から、30年間に日本語研究者全体が高齢化していることが読み取れる。しかし、これは「国語関係者名薄」の性格を考慮しなければならない。一度名薄に載ると、はっきりした理由がなければそのまま継続される傾向がある。したがって、名薄はどんどん膨らみ、自然に高齢化してしまうのである。そのような影響を考慮しても、1990年の場合で70代後半、1980年の場合で60代後半にある種の集中が見られる。この偏りは図2の年

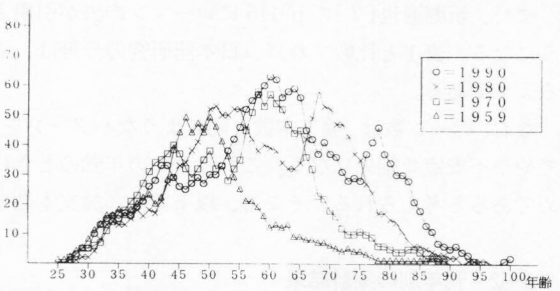

図3 1959、1970、1980、1990年の研究者の年齢分布

齢別の図よりも大きい。したがって、図2の1975～1984年の70歳前後のピークはこのような年齢分布の偏りによるものであると考えるべきである。(図は省略するが、年齢グループ別の論文生産量を算出すると、このようなピークは見られなくなる。)

1953～1964年では、30歳代の若い人がかなり書いている。このころは、日本語研究に「若さ」があった時期ともいえるであろう。戦後、国立国語研究所の設置をはじめ、新しい日本語研究の流れが起こった時期であると考えられる。

刊年ごとの平均年齢を求めると、表2のようになる。この表からも、最近は論文生産年齢がだんだん高齢化していることがわかる。

3—3 生産性別の集計結果

論文を書く「生産性」に関して大きな個人差があることはよく知られている。新堀〔6, 7〕にもその一部が報告されている。

論文をたくさん書く人は、若いときから多く書くのだろうか。高齢になっても多く書くのだろうか。論文の生産性と年齢の関係はどのようなものだろうか。

さて、このようなことを調べるには、まず、研究者のひとりひとりを多産者と少産者とに区別しなければならない。フロッピー版に収録されている論文データベースは限定された範囲の30年分でしかない。一方、論文生産は年齢によって大きな違いがあることはすでに見た通りである。研究者の年齢は、どの時点をとってもさまざまである。すでに死亡した人の場合は論文の生産は止まるが、現存する人の場合はこれからさらに追加されるであろう。死亡した人でも、若くして死亡した場合と天寿をまっとうした場合とでは当然論文数が異なる。このような状況で客観的に多産者と少産者を区別するにはどうしたらいいだろうか。

ここで、ある人が生涯で何本の論文を生産すると期待されるか、その期待値を求めて、それを比較の指標にすることにした。期待値の算出は次のようにした。まず、個人ごとに死亡年を設定した。すでに死亡した人はその年、現存する人は1984年（フロッピー版に収録されている最新論文の日付)、生死不明者(国語年鑑で途中から掲載されなくなった人がほとんど）はフロッピー版の最終論文の刊年を死亡年とした。生年と死亡年の間で、かつ1953年から1984年(フロッピー版に収録されている年）の間にその人が何本論文を書いたかを調べ、図1で示した年齢別論文本数の数値を当て

表2 刊年別の論文本数と平均年齢

刊年	論文本数	平均年齢
1953	1072	43.94
1954	1138	44.71
1955	1253	44.96
1956	1229	44.91
1957	1132	44.83
1958	1140	45.87
1959	1372	45.22
1960	1553	45.08
1961	1654	46.12
1962	1509	45.75
1963	1408	45.13
1964	1365	46.58
1965	1449	47.01
1966	1437	46.75
1967	1405	47.19
1968	1856	48.60
1969	1627	47.48
1970	1837	47.51
1971	1509	48.25
1972	1599	48.77
1973	1610	48.43
1974	1564	49.05
1975	1726	50.49
1976	1954	50.02
1977	2174	50.76
1978	2031	50.51
1979	2001	51.05
1980	2068	51.57
1981	1931	52.32
1982	1962	51.87
1983	1986	52.14
1984	1945	52.22

はめてデータのない部分を推定して、個人ごとの生産性の数値(期待値：何本の論文を書いたと推定されるか) を計算した。

別の面から言い替えると、論文の期待値は、その人が105歳まで生きていたとした場合に生産したであろうという論文の数である。したがって、物故者の場合でも「検証」することはできない性格のものである。

資料2には、期待論文数の数値の高いほうから順に個人データが並べてある。最高値は保科孝一であるが、このデータに基づいて、読み方を記しておこう。保科の場合、国語年鑑に収録された論文が5本、23ページあり、それは1953年から1956年に公刊されたものであるが、このときの保科の年齢は81-84歳であった。このような年齢では、図1で示されるように普通はあまり論文を書かないものなので、図1の数値を当てはめて80歳以前の論文執筆数を推定すると非常に大きな数値になってしまうのである。このように、あまり本数が少ない人（高年層・若年層）の場合はこの数値は信頼できないが、ある程度の本数を書いている人の場合は、論文生産期待値はかなり信頼できる結果になっていると思われる。[注1]

こうして個人ごとに生涯論文生産期待値が計算されたら、延べ51502人(異なり3114人)を多産者・中産者・少産者に区分する。延べ人数は、名前の出現回数であり、概略的な論文本数である。つまり、それぞれの論文が多産者・中産者・少産者のいずれによって書かれたかがわかる。こうして、5万本の論文をほぼ同じサイズの3グループに分けることにした。その分割のしかたを表3に示した。

表3で、期待値不明、すなわちゼロであるということは、一本も論文を書かない人が国語年鑑に載っているということである。多くは、国語年鑑刊行以前に書いた人、他分野の人、若い人、などである。

生産性別に見た年齢別論文本数を図4に示した。この図でわかるように、多産者のグループは30代、40代は他のグループよりも論文を書かないが、60代、70代にかけてたくさん書くパターンになる。また、中産者グループは30代にはかなり論文を書くが、40代から50代にかけて「息切れ」するのだろうか、論文の生産量が減ってくる。各グループの論文執筆平均年齢を求めると、少産者、中産者、多産者は、それぞれ47.88歳、46.19歳、51.16歳になる。

以上のことから、論文の多産者というのは、高齢になっても研究を続けていくタイプであることがわかる。

表3　生産性別にわけた3グループ

生涯論文生産期待値	延べ人数	異なり人数
103.5以上	17065人	241人
42.90以上103.5未満	17154人	567人
42.90未満	17075人	1643人
不明		663人

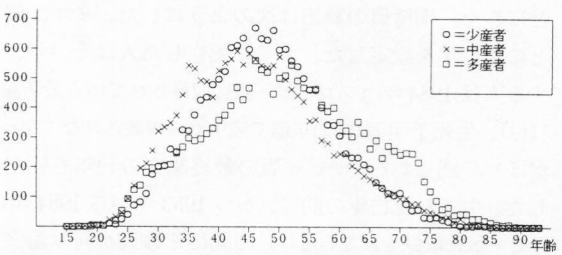

図4　生産性別に見た年齢別論文本数

ただし、個人別の期待値の算出にあたり、図1のデータを年齢別生産性と見なしたので、高年齢で論文を書いている人は期待値が高めに算出される傾向がある点に注意すべきである。

3—4　分野別の集計計果

日本語研究の流れを見ていく場合、分野ごとにかなり違っているだろうということは容易に想像しうる。そこで、データを分野別に集計して、その年齢構造を見よう。

分野の区分には、論文1本ごとの区分と研究者ひとりごとの区分が考えられる。研究者ごとの専門領域は、たとえば国語年鑑の記載を見ればわかる。しかし、ある研究者が多分野にまたがって論文を書く場合があるので、研究者ごとの区分では分野別の集計結果としては十分ではない。そこで、論文ごとの区分を採用することにした。この場合は、フロッピー版の分野別区分に従うのが最も手軽である。フロッピー版の下位区分ごとの平均年齢を求め、その値の順に並べ変えた結果が表4である。表4を見ると、論文生産年齢が「若い」分野とそうでない分野があることを見てとれる。

若い分野の代表というのは、「日本語情報処理」である。新しい分野だけに若い人が多くの論文を書くことが多いのだろう。また、若い人が多くの部分をしめる理科系（工学系）の研究者の書いた論文が多数収録されていることも影響していると思われる。それ以外に「待遇表現、文法、音声・音韻、方言」などが比較的若い人が活躍する分野である。これらの分野は、研究法・研究の焦点や課題などが次々と変わってきた。ある意味では研究の流れの中に流行があったともいえる。ということで、あまり過去の蓄積にこだわらずに新しい論文が書ける面があり、若い人が活躍しやすいのではないか。

表4　日本語研究の下位分野ごとの平均年齢

記号	平均年齢	分野名	ファイル名
K	42.95	日本語情報処理	KIKAI. DAT
G	44.20	待遇表現	TAIGUU.DAT
F	44.78	文法	BUNPOU.DAT
C	44.81	音声・音韻	ON-IN.DAT
J	44.95	方言	HOUGEN.DAT
B	45.61	国語史	GOSI.DAT
M	45.64	マスコミュニケーション	MASU.DAT
T	46.47	書評・紹介	SYOHYOU.DAT
D	46.84	文字・表記	HYOUKI.DAT
H	46.96	文章・文体	BUNSYOU.DAT
Q	47.54	日本語教育	NIHONGO.DAT
R	47.69	言語学	GENGO.DAT
S	47.76	国語研究資料	SIRYOU.DAT
E	48.87	語彙	GOI.DAT
P	49.40	国語教育	KOKUGO.DAT
L	50.12	コミュニケーション	KOMI.DAT
A	51.04	国語学一般	IPPAN.DAT
I	52.82	古典の注釈	KOTEN.DAT
N	56.66	国語問題	MONDAI.DAT

比較的高齢者ががんばっている分野というと、「国語問題、古典の注釈、国語学一般」などが挙げられる。これらの分野では、テーマ自体があまり変化せず、結果的に長年の蓄積を基に蘊蓄を傾けたような発表物が多くなる。したがって、若い人は書きにくく、むしろ老

大家が書く傾向が強いのであろう。読む側もそのような老大家の書いたものをありがたがる傾向があるのであろう。

4. 研究の位置付け

日本語研究者の論文執筆時の年齢を調べた結果、上述のようになったわけだが、ここで、このような研究の位置付けについて考えてみよう。

第1に、この研究は、現代の日本語学史と言ってもよかろうと思う。従来の日本語学史は一部の著名な日本語研究者の代表的な著作を取り上げ、相互の関連、研究の発展の経緯などを述べたものが多かった。この研究は、たくさんの人のたくさんの論文を対象にして、マクロに見たときの日本語研究の全体がどのように行なわれるかを量的に把握したものである。その意味で、新しい日本語学史の芽であるといえよう。今後論文データベースが拡充されれば、(そしてそれは今後の方向として当然のことであるが、)さらに新しい面の日本語学史研究ができる可能性がある。

第2に、「論文を書く」ことは言語行動の一部であり、そのような言語行動がどのように行なわれるかという問題は、言語行動論の研究の一部である。論文を書く人を中心に見て、どのような属性の人が論文を書くかを明らかにしたものといえよう。ただし、扱った範囲はまだまだ狭く、今後「どんな人が論文を書くか」という属性論的な研究が行なわれうる。

第3に、この種の研究は科学社会学の一部として位置付けることも可能である。研究者集団がどのような特性を持つかということは社会学者が興味と関心を示す分野である。

余談ながら、それぞれの研究者の「将来予測」(自分の一生を予見すること)もできよう。

付加的な意味付けであるが、フロッピー版の文献目録を、著者の個人別に検索するためには「名寄せ」が必須である。今回の経験は、そのような検索への一歩でもある。

5. 今後の課題

この研究を始めてみると、さまざまな困難があり、またそれがおもしろかったのだが、今後の課題として残された問題もいろいろたくさんある。

第1に、年齢以外の個人の属性の問題がある。すでに、出身地・出身大学の情報は国語年鑑などから入力ずみであり、興味深い結果も得られているが、今回は省略することにした。勤務先別集計(研究所と大学の差・国立と私立の差)や、定年・転勤・昇任の影響があるかなどもおもしろいテーマになりうる。国語年鑑の「国語関係者名簿」を過去数十年分入力すれば、それも可能になる。また、「男女差があるか、既婚・未婚の影響はあるか」というような問題がある。コール他〔9〕のような興味深い研究(子供を産んだかどうかは論文生産とは関係ないことを実証)があるのだが、今回は、個人データを基本的に国語年鑑に求めたので、性別や既婚/未婚すらわからないままである。山崎〔10〕のように、名前を手がかりにして性別を推定するのも可能であるが、正確性に欠ける部分がある。性別を名前で判断することのむずかしさの例として、たとえば沢田治美・由良君美などの男性研究者の例がある。

第2に、単行本のデータの集計がある。単行本のデータについては、試用版段階であるが、国立国語研究所情報資料研究部の好意で試用させていただいた。論文よりも生産年齢が高くなることは明らかであるが、現在のところデータ中の誤りが多く、集計作業に予想外に手間取り、今回は触れられなかった。

第3に、データのいっそうの整備ということがある。これは個人の力ではやりきれない。現在のフロッピー版の場合でもさまざまな問題があることはすでに述べてきた。論文データベースに対してプログラムによるチェックをもっとやっておけば、利用の効率がいっそう高まっただろう。

第4に、日本語研究史の新たな展開である。たとえば、時代をおって国語年鑑が厚くなり、論文生産が多くなっている。全体として、日本語研究は盛んになっているといってもいいだろう。しかし、それは研究者の人数が増えたからであり、個人ごとの生産性があがったわけではないのではないか。個人の生産量は（時代は越えて）一定なのではないか。このようなことを調べるには、現在のフロッピー版のデータでは明らかに不足である。

注1　個人別の生産性を計測することは、研究者個人を量的に評価しているという見方もできる。このような研究および研究者の評価は、量的把握はできても、質的評価は困難である。しかし、一方では、質は量でなければ表現できないという面も持つ。京極純一氏は、1992年2月22日の統計数理研究所での講演会のコメントで、データの量と質について次のような趣旨の発言を行なった。

量による序列化によって、新しい秩序が見えてくるものである。個人で見るならば、量でたちうちできない人は「自分はユニークだ。量的には評価できない。質で見てくれ」と主張する傾向がある。大学入試でも、偏差値（量的データ）の反対概念（つまり偏差値ではかれないもの）として持ち出されるのはいつも「個性値」である。個性（質的データ）は、相互に比較することがむずかしい。したがって、質的な評価もむずかしいものである。

謝辞

本稿は、国語学会平成4年度春季大会での口頭発表を加筆・修正したものである。大会の席上、大島一郎氏をはじめ、多くの方々から貴重な御意見をいただいた。また、国立国語研究所の大塚通子・伊藤菊子両氏は、荻野の問い合わせに対していくつかの貴重な情報を提供してくださった。ここに記して謝意を表する。ただし、個人データなどを直接に提供していただいたわけではない。今回の集計のプロセスにおける誤りは荻野の責任である。

参考文献

［1］天野敬太郎監修/佃実夫他編（1979.3）『現代日本執筆者大事典』日外アソシエーツ
［2］紀田順一郎他編（1984.8）『現代日本執筆者大事典 77/82』日外アソシエーツ
［3］日外アソシエーツ（1989.9）『日本著者名・人名典拠録』日外アソシエーツ
［4］日外アソシエーツ（1990）『キーパースン　文芸・学術・社会』日外アソシエーツ（電子ブック）
［5］広潤社（1978）『全国大学職員録　昭和53年版』広潤社
［6］新堀通也（1981）『学者の世界』福村出版

［7］新堀通也（1978）『日本の学界』（日経新書）日本経済新聞社
［8］田尻英三（1990.7）「方言研究法について」解釈と鑑賞55巻7号
［9］J.R.コール・H.ズッカーマン（1987.4）「結婚・母親業と研究活動は両立するか」サイエンス Vol. 17, No. 4
［10］山崎誠（1990.3）「『日本語研究文献目録・雑誌編』にみる国語研究の動向」『国立国語研究所報告101 研究報告集11』秀英出版

資料1　論文執筆本数が多い人の年齢別執筆本数（年齢：本数）

石井庄司（1900生）執筆時期＝53歳～83歳　合計200本
53：4　54：5　55：13　56：10　57：19　58：16　59：16　60：8　61：13　62：10　63：10　64：10　65：6　66：7　67：6　68：6　69：7　70：3　71：1　72：3　74：4　76：1　77：2　78：3　79：4　80：4　81：4　82：3　83：3

岩淵悦太郎（1905生）執筆時期＝48歳～73歳　合計318本
48：18　49：6　50：6　51：14　52：7　53：9　54：15　55：6　56：9　57：13　58：7　59：9　60：14　61：7　62：4　63：54　64：27　65：16　66：21　67：9　68：7　69：3　70：6　71：11　72：17　73：3

大石初太郎（1911生）執筆時期＝42歳～73歳　合計203本
42：6　43：13　44：3　45：6　46：13　47：5　48：4　49：8　50：6　51：7　52：5　53：9　54：8　55：9　56：11　57：13　58：4　59：8　60：2　61：6　62：4　63：4　64：5　66：4　67：3　68：6　69：2　70：7　71：12　72：3　73：2

大久保忠利（1909生）執筆時期＝44歳～75歳　合計315本
44：12　45：15　46：21　47：12　48：9　49：4　50：7　51：11　52：24　53：23　54：15　55：17　56：14　57：14　58：7　59：10　60：8　61：6　62：8　63：6　64：10　65：5　66：6　67：6　68：9　69：6　70：14　71：9　72：2　74：3　75：2

倉沢栄吉（1911生）執筆時期＝42歳～73歳　合計260本
42：9　43：16　44：26　45：12　46：8　47：16　48：8　49：9　50：11　51：16　52：10　53：6　54：3　55：7　56：4　57：11　58：7　59：7　60：8　61：5　62：5　63：4　64：4　65：5　66：5　67：5　68：4　69：9　70：3　71：9　72：3　73：5

国分一太郎（1911生）執筆時期＝42歳～73歳　合計204本
42：5　43：7　44：9　45：3　46：7　47：3　48：2　49：15　50：15　51：15　52：16　53：10　54：3　55：7　56：6　57：17　58：8　59：7　60：4　61：4　63：2　64：2　65：5　66：6　67：1　68：4　69：7　70：4　71：3　72：3　73：4

輿水実（1908生）執筆時期＝45歳～76歳　合計275本
45：2　47：9　48：10　49：2　50：2　51：4　52：3　53：3　54：4　55：7　56：3　57：10　58：15　59：15　60：15　61：3　62：3　63：1　64：3　64：3　65：3　66：12　67：16　68：15　69：8　70：12　71：8　72：18　73：37　74：15　75：3　76：14

柴田武（1918生）執筆時期＝35歳～66歳　合計242本
35：8　36：2　37：12　38：3　39：11　40：11　41：12　42：9　43：12　44：8

45：9　46：6　47：12　48：8　49：3　50：14　51：7　52：5　53：7　54：6　55：1
56：4　57：4　58：9　59：10　60：5　61：9　62：3　63：8　64：6　65：5　66：13

中沢政雄（1907生）執筆時期＝46歳～77歳　合計276本

46：1　47：5　48：1　49：1　50：1　51：1　53：1　54：9　55：5　56：6　57：7
58：5　59：15　60：11　61：8　62：1　63：9　64：6　65：5　66：9　67：8　68：22
69：21　70：17　71：16　72：17　73：14　74：21　75：11　76：9　77：13

野地潤家（1920生）執筆時期＝33歳～64歳　合計253本

33：2　35：3　36：4　37：3　38：2　39：5　40：8　41：7　42：15　43：9　44：8
45：8　46：7　47：11　48：13　49：9　50：7　51：12　52：11　53：6　54：8　55：15
56：6　57：6　58：10　59：11　60：12　61：5　62：13　63：7　64：10

野元菊雄（1922生）執筆時期＝31歳～62歳　合計257本

31：2　33：1　34：4　35：8　36：8　37：4　38：5　39：12　40：6　41：4　42：1
44：1　45：9　46：15　47：2　48：3　49：7　50：7　51：11　52：10　53：11　54：15
55：17　56：16　57：10　58：12　59：22　60：4　61：18　62：12

林四郎（1922生）執筆時期＝32歳～62歳　合計201本

32：3　34：1　35：2　36：6　37：7　38：11　39：9　40：9　41：8　42：4　43：14
44：8　45：6　46：21　47：3　48：8　49：4　50：2　51：6　52：9　53：5　54：6
55：6　56：7　57：4　58：4　59：13　60：3　61：5　62：7

水谷静夫（1926生）執筆時期＝27歳～58歳　合計214本

27：3　28：2　29：2　30：2　31：4　32：8　33：13　34：8　35：8　36：9　37：11
38：6　39：11　40：5　41：3　42：17　43：10　44：8　45：8　46：7　47：4　48：16
49：4　50：5　51：4　52：7　53：7　54：5　55：6　56：6　57：2　58：3

資料2　論文執筆期待値の高い人

論文数期待値	論文数実数	ページ数期待値	ページ数実数	生年	最終年	名前
1893.46	5	10252.92	23.00	1872	1956	保科孝一
1290.24	12	16251.31	125.00	1875	1960	柳田国男
1261.44	93	2110.46	175.78	1885	1977	土岐善麿
999.39	120	5040.58	667.39	1889	1974	西尾実
925.69	11	3592.08	41.00	1876	1968	新村出
869.23	4	9418.49	39.00	1872	1977	金沢庄三郎
867.04	5	13986.60	66.00	1960	1984	森山卓郎
824.73	38	3206.18	160.33	1882	1969	金田一京助
658.98	318	4302.31	2100.78	1905	1978	岩淵悦太郎
576.60	200	3124.91	1116.15	1900	1983	石井庄司
569.37	77	4164.03	616.00	1890	1983	宮田和一郎
568.19	14	6413.72	159.49	1957	1984	小林隆
519.95	39	5069.37	398.75	1947	1978	原田信一
506.40	315	5310.31	3295.10	1909	1984	大久保忠利
489.06	276	9736.68	5536.58	1907	1984	中沢政雄

481.90	196	2053.80	859.45	1902	1984	松坂忠則
480.77	152	2225.76	727.57	1899	1979	石黒修
467.29	14	1308.14	40.83	1926	1984	百目鬼恭三郎
462.98	275	6853.34	4073.20	1908	1984	興水実
458.47	21	9542.42	473.38	1882	1968	玉井幸助
450.29	8	2831.03	55.00	1878	1959	春日政治
420.87	35	842.78	78.75	1886	1972	颯田琴次
405.34	67	2192.98	384.00	1892	1981	三宅武郎
400.51	22	1363.13	82.45	1883	1976	内藤濯
399.56	97	3322.97	848.95	1896	1982	古田拡
384.46	260	3128.65	2097.66	1911	1984	倉沢栄吉
381.50	2	2746.55	13.00	1873	1961	山田孝雄
365.57	17	3111.03	148.00	1955	1984	米川明彦
362.69	6	4474.22	73.20	1958	1984	杉本武
348.23	29	944.46	88.33	1886	1965	河野巽
323.08	103	4919.06	1619.76	1899	1982	佐伯梅友
319.57	257	1612.11	1272.23	1922	1984	野元菊雄
315.26	253	5411.92	4251.20	1920	1984	野地潤家
314.83	187	3004.08	1785.44	1908	1982	平井昌夫
311.19	62	3744.64	782.67	1894	1976	久松潜一
306.76	242	2227.80	1723.77	1918	1984	柴田武
305.00	42	1395.16	209.00	1891	1967	志波末吉
301.66	204	3267.22	2190.57	1911	1984	国分一太郎
300.18	203	1886.86	1265.08	1911	1984	大石初太郎
295.50	70	3703.27	926.18	1896	1976	西原慶一
288.98	64	1305.25	303.40	1895	1983	山中襄太
285.73	152	4038.84	2171.41	1906	1984	滑川道夫
279.55	13	1913.70	91.04	1955	1984	木川行央
278.96	29	2046.72	238.00	1888	1969	佐久間鼎

——筑波大学助教授——

(平成5年3月2日　受理)
(平成5年4月1日　改稿受理)